



## 作家解説

**大内青圃**（1887–1973）東京生まれ。父は仏教学者大内青巒。東京美術学校に入学し、高村光雲に木彫を、水谷鉄也に塑造を学ぶ。1927年（昭和2）日本美術院同人。生涯仏像彫刻を作り、仏彫に新しい一面を切り開いた。「自分については余り語るのを好まない大内君は黙々として制作に精進しその帰結を求めて作品に語らせ独自の境地を開拓してきた作家である。」と、田中談にある。

**大橋敏男**（1882–?）京都生まれ。東京工業大学卒業後、田中に師事。1917年（大正6）、日本美術院の院友に推挙される。日本美術院展に出品された作品はほぼ全て、一本の木片から削り出し制作されている。田中コレクションには2作品が所蔵されているが、いずれも静謐な空気をまとう印象的な作品である。38年（昭和11）株式会社沖電気の技師。その後の経歴は不詳。

**喜多武四郎**（1897–1970）東京生まれ。戸張孤雁に師事。1920年（大正9）日本美術院の研究会員となり、石井鶴三の指導を受ける。21年（同10）院友、27年（昭和2）同人となる。美術院彫塑部の解散後は、日本画府彫塑部会員に迎えられた。一貫して人体をモチーフにした制作を行い、一切の余計を排した造形性を獲得した。橋本平八の『純粹彫刻論』で、田中に続いて序文を書いている。

**佐藤朝山**（1888–1963）福島で代々宮彫師をつとめた家に生まれ、幼時より父や叔父に彫技を学んだ。1904年（明治37）、上京して山崎朝雲に師事。14年（大正3）、日本美術院に加わり、同年に同人となる。22年（同11）渡仏、ブルーデルに師事した。帰国後は洋風彫塑と日本の伝統を踏まえた作品を発表する。のちに師の朝雲と不和になったことから、師からもらった朝山の号を返上して、本名の清蔵、続いて玄々と名乗った。

**竹内久一**（1857–1916）江戸浅草生まれ。堀内龍仙、川本州楽に牙彫を学ぶ。1880年（明治元）、観古美術界で奈良興福寺の古像に感銘し木彫家を志す。88年（同21）より東京美術学校彫刻科に務め、没するまで任を全うした。代表作としては、1893年（同26年）シカゴ万国博覧会に出品した《技芸天》や《神武天皇像》などがある。文展では審査員を務めるなど、高村光雲とともに明治の彫刻界に果たした功績は大きい。田中は「一に久一、二がなくて、三に杜園」と語ったことがあり、高く評価していた。

**橋本平八**（1897–1935）三重生まれ。郷里の三宅正直に学んだのち、日本美術院の佐藤朝山に師事した。1922年（大正11）日本美術院の研究会員、27年（昭和2）同人となる。35年（同10）脳溢血のため38歳で早逝。田中と橋本は子弟の関係にはないが、田中は自分より25歳も年少だった橋本の才能を愛し、生前から作品を購入していた。本学が所蔵する橋本の作品14点は、全て田中が寄贈したものである。また橋本の没後、実弟で前衛詩人の北園克衛の編集により『純粹彫刻論』（昭森社、昭和17年）が刊行された際には、田中がその序文を書いている。

**平櫛田中**（1872–1979）岡山生まれ。はじめ大阪で人形師の中谷省古に彫刻の手ほどきを受けた後、上京し高村光雲の門下生となって木彫を学ぶ。1898年（明治31）、湯島の麟祥院で西山禾山が臨濟録について語るのを聞き、その後の思想形成、制作のモチーフなどに大きな影響を受ける。1908年、日本彫刻会第1回展に《活人箭》を出品し、岡倉天心の推奨を受ける。再興院展にて精力的に作品を発表し続け、44年（昭和19）より東京美術学校彫刻科木彫部教授となって後輩の指導を行う。50年、自作も含めた所蔵の彫刻作品を東京藝術大学へ寄贈。その後も寄贈を続け、田中コレクションは計149点に及んだ。100歳の誕生日に約30年分の木材を買い込むというエピソードから類推できるように最期まで旺盛な制作意欲が衰えることはなかった。

**藤川勇造**（1883–1935）現在の高松市生まれ。漆彫の玉椿象谷の嫡孫である。1908年（明治41）東京美術学校彫刻科を卒業し、農務省海外練習生として渡仏。翌年、アカデミー・ジュリアンのジャン＝ポール・ローランスのもとで素描を学んだ。1910年にロダンに認められて、彼の助手を務める。1915年（大正4）に病のため帰国した後は二科会会員となって活動。

**宮本重良**（1895–1969）東京生まれ。本名重次郎。1915年（大正4）から太平洋画会研究所、日本美術院研究所に学ぶ。石井鶴三に師事。24年再興第11回院展に初入選。30年（昭和5）第17回院展に《童女像》《男立像》を出品して日本美術院賞を受賞、36年に同人に推挙された。戦後も院展に毎年出品していたが、61年、彫塑部解散に伴い退会、燦々会を結成。芭蕉について深く研究し、多くの芭蕉象を残した。

**宮本理三郎**（1904–1998）大分生まれ。1924年（大正3）、三谷光月に師事。翌25年（同14）に上京し、佐藤朝山の門下生となる。日本美術院に参加し、34年（昭和9）院友に推挙される。戦後は生活のために、田中のもとで仕事の手伝いをするのがあったという。田中コレクションの中で宮本理三郎の作品は12点と最も数が多く、魚・蛙・鳩・茄子など、本物らしさを細部まで追求した作品によく特色が表れている。

**森川杜園**（1820–1894）奈良生まれ。内藤其淵に絵画を学ぶ。柴田是真の勧めにより奈良一刀彫を始め、春日大社等の仕事に従事するとともに、数多くの仏像や社寺の宝物の模造を行った。優れた彩色技術は田中に影響を与えた。田中は戦前から森川杜園の作品を熱心に蒐集しており、田中コレクションの中には5点所蔵される。狂言においても高い技能を有し、しばしば彫刻の題材に用いている。

**山本豊市**（1899–1987）東京生まれ。中学在学中から彫刻を志し、卒業後戸張孤雁に師事。1918（大正7）年、太平洋画会研究所に入り、彫刻と素描を学ぶ。1924（同13）年渡仏してマイヨールに師事し、4年間過ごす。帰国後は仏像への関心を深め、1930年代には乾漆技法を研究する。1949年（昭和24）東京芸術大学講師、1953年（同28）に教授に就任し、多くの学生を指導した。田中コレクション中、山本豊市の作品は7点あり、宮本理三郎に続いて多い。

**吉田白嶺**（1871–1942）東京生まれ。四条派の飯島光峨に日本画を学んだが、実弟の彫刻家吉田芳明の活躍に触発されて彫刻を志し、月谷初子に彫塑の指導を受けた。岡倉天心の創設した日本彫刻会に参加したのち、1914年（大正3）、日本美術院彫刻部に加わり、同人となる。山本鼎の農民美術運動に協力し、生活と彫刻との関係を追求した。小禽類の精緻な作品を数多く残す。埴輪や乾漆技法の研究も行った。

<sup>[</sup>\* 『平櫛田中 次世代に遺した珠玉の彫刻』小平市平櫛田中彫刻美術館（2009）を参照した。